

## 『グローバル天理』第2号掲載論文要旨

### **井上 昭夫 「巻頭言グローバリゼーションと「裏守護」再考」**

天理教の「元の理」において、親神の守護の解説背景に「裏守護」の説き分けがある。それは、現代のグローバリゼーションの潮流とそれに対する民族主義、原理主義を考える上で、示唆に富んでいる。また、世界の多様な宗教思想が持つ、歴史的な特徴や多様な文化の個性を見極めることにより、その特性を親神の十全の守護に対応して検証することは、「元の理」の文明的解釈だろう。天理教学においては、「裏守護」が示唆するパラダイムの文明的展開が求められる。

### **太田 登・中井 精一 「天理教原典とやまとことば(2) 大和のことばとその背景」**

天理教原典の一つである「おふでさき」で使われる言葉は、奈良県の方言でもある「大和ことば」が深く関わっている。それを音声と語彙・表現等の面からいくつか具体的な例を掲げて比較する。大和ことばは、早くから上方の影響下にあって独自の言語文化をほとんど持たない北部の奈良盆地と、単純で素朴な言語表現を用いる山間地の二つの方言世界から成り立っている。

### **笹田 勝之 「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—(2) 序章「さとり」の語義と問題」**

ここでは「さとり」を語源と漢字から語義を考察し、さらに仏教語としての「さとり」を概観して、「さとり」についての問題を提示する。

### **堀内 みどり 「天理異文化伝道の諸相(2) 天理教のコンゴ伝道[1]」**

「異文化」への伝道として、今回から天理教のコンゴ伝道を連載する。このシリーズでは、おやさと研究所の「伝道研究会」でのコンゴ伝道関係者による発表を元に、その歴史や方法を振り返っていく。1960年二代真柱は研究発表のためヨーロッパでの学会に出席し、その後アフリカを回った時に、当時のコンゴの首都ブラザビルに立ち寄る。そして、コンゴ伝道はその時の二代真柱と一人のコンゴ人との出会いから始まる。

## **アデル M. スタン 「共通の主張を求めて―世俗的フェミニズム・宗教的フェミニズム（１） カータレットの美人コンテスト」**

私は幼いころ、最初の故郷であるニュージャージー州北部の町、カータレットで美少女コンテストに出場した。1960年代半ばのアメリカでは、幼い少女たちのアイドルはバービー人形とミス・アメリカだった。私は母親との二人三脚でコンテストに備え、リバティー公園で行われた地区予選では優勝し、「リトル・ミス・リバティー公園」となった。そして、次は「リトル・ミス・カータレット」を目指すことになった。

## **金子 昭 「天理経営学―その歴史・哲学・展望―（２） 歴史編 1 天理教者の経営観 [ 1 ] 」**

天理教においては、聖俗の二分法は成立しない。この歴史編では、天理教の信仰に生きつつ、経営者でもあった3人の人物を見ていく。はじめに米屋羊羹の創業者である諸岡長蔵を取り上げる。諸岡は事業に成功を収める一方で、モラロジーで知られる広池千九郎への援助や社会への利益還元を続けていった。しかし、多くの場合それは匿名的な形で行われたため、彼の事跡はごく一部のみにしか判明していなかった。

## **佐藤 孝則 「エコロジーの思想と実践（２） メソポタミア文明の盛衰と「エコロジー」」**

世界最初の都市文明として栄えたメソポタミア文明は、自然の微妙なバランスの上に成立していた。紀元前5500年頃のウバイド文化期は、自然環境の収容力がそこに住む人間を養いうる限界内にあったので、循環システムが機能していた。しかし、紀元前3500年頃開花したウルク文化期には、人口増が自然環境の収容力を超えて、循環システムが崩壊してしまう。それがメソポタミア文明の崩壊を招いたことは、今日の我々に有益な示唆を与えている。

## **小滝 透 「天理比較神秘論への試み（２） 神話 [ 1 ] 」**

神秘主義は、生命の枯渇を潤す呼び水であり、神話は貯水池である。天理教の創世神話である『元の理』は、人間と他の生命体との連続性を明らかにしている。一方、支配―被支配関係を基本とする西欧文明においては、人間が神を押

しのけてその支配関係の頂点に立ったことにより、人間の欲望が全開され自然搾取を極限まで行き渡らせてしまった。『元の理』を再現する「かぐらづとめ」は、自然とのつながりを切断した現代文明に、新たな世界観をもたらす。

### **小林 正佳「芸術・癒し・宗教（２） 民俗舞踏とわたし」**

民俗舞踏の特質について、社会的条件や歴史といった「民俗論」の立場からではなく、踊りを構成する「動き」そのもの、上演の際の音と動き、人と人との協働の仕組みといった観点から考える。自身の民俗舞踏への関わりを振り返り、実体験にもとづく感慨、民俗舞踏への「こだわり」等について述べる。

### **塩沢 千秋「脳死・臓器移植－カナダ通信（２） 命の始めと終わり」**

医療技術の発達が可能とさせた脳死判定によって、生死の境界が曖昧になった。その脳死判定が人々の精神的苦痛を増大させた例として、妊娠しているながら脳死判定を受けた女性の事例を見る。そして、命の歴史の辿ってきた始めと終わりを、人間の遺伝子の誕生から考察していき、現代医療の基本的なあり方に疑問を投げかける。

### **金子 珠理「ジェンダー・女性学情報（２） マイノリティの視点の意義」**

マイノリティとは統計的な概念ではなく政治的な概念である。フェミニズムはマイノリティ意識から生まれ、複合的マイノリティによる批判を受けて展開してきた。これをフェミニズム認識論から、歴史的、理論的に捉え直し、フェミニズム認識論におけるマイノリティの視点の位置付けを考える。

### **深川 治道「エコロジカル インタビュー（２） 環境マネジメントシステムと大学〔２〕」**

日本の教育機関で初めて ISO14001 の審査登録を受けた武蔵工業大学横浜キャンパスを取材した。ここは ISO14001 に関わらず、環境情報学部の新設にともない、エコロジカル・キャンパスを目指して建設されている。そのため、開設当初から節電・省エネの工夫を取り入れた施設や設備を備えていたが、ISO14001 への取り組みによって、教職員だけでなく学生の積極的な参画を得て、さらに環境負荷の少ないキャンパスへと向かっている。

## 小椋 博 「宗教・スポーツ・賭け（2） 「賭ける」と「懸ける」」

賭けの基本的要素である「運」は、否定的評価と肯定的評価に分かれる。「かける」という語も、受動性・非生産性を持つとして否定的評価を受ける「賭ける」と、能動性・主体性を持つ「懸ける」という二義性を持つ。ギャンブル自体の属性にはその認識や道徳的判断の根拠となるものはなく、社会的・文化的な文脈に解釈が左右される。

## 上杉 武夫「都市の再生に向けてーアメリカ通信（2） N.カーリーと J.シェーファー」

カリフォルニアのサステイナブル運動にあつて、21世紀をリードすると思われるアプローチをしている二人の人物を紹介する。N.カーリーはサステイナブル建築の第一人者であり、彼の非木材建築、コンクリートと鉄の利用を最小化する建築は多くの注目を集めている。J.シェーファーは、代替エネルギーやリサイクルを中心とした環境産業と教育を併せ持った企業で、急成長をしているリアルグッズの創設者である。